

宇都宮城の変遷をたどる

宇都宮伝統文化連絡協議会員

柏村 祐司

郊外へ移転する等町並みの改修も行つた。この結果、宇都宮城および城下の街並みは、幕府の信任厚い大名に相応しいものとなつたのである。

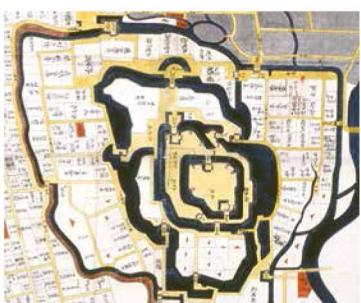
宇都宮城址公園が開園したのは、平成十九年である。かつての御本丸の約半分ではあるが、清明台、富士見櫓、石垣と土塁、土堀および堀が復元された。復元規模は小さいが、それでも市当局は、復元に当たつて大変な苦労をされた。民有地を買収するとともに何よりも宇都宮城は、徹底的に破壊されていたからである。

宇都宮城築城の由来については、藤原秀郷が築いたとも初代城主の宇都宮宗円が築いたともされるが確証はない。ともあれ鎌倉時代には宇都宮氏の居城としてあつたことは確か

宇都宮城は、地の利を利用して築かれた。市街地の地形は、田川低地、それから一段上がりた田原台地、さらに一段上がった宝木台地からなる。田川低地には、築城以前から町人町があつたと思われる。宇都宮城が築かれたのは、田原台地であつても釜川が流れ台地、それも東の端、段丘崖に沿つた所である。田原台地はうに、地下水層が浅く井戸を掘るのが容易であり人々の生活はできる。また東端の崖に沿つた所は、崖下に田川が流れ防護には打つつけの所であったからである。

馬出し堀を設ける等をした。

一方、従来の奥州道と日光道をつけ替え、不動前から伝馬町まで同じ道にし、そこで分岐するとともに、日光道・奥州道沿線には町人屋敷を配置、町人屋敷を挟んで両側に武家屋敷を設けた。また桂林時や光琳寺等旧城郭近辺にあつた寺院を



宇都宮御城内外絵図
(宇都宮市教育委員会提供)

城城は館を中心とする三重に取り囲んだもので、その域内に家来の屋敷が展開した。なお、城を宇都宮大明神に近接し真南に築いたのは、宇都宮氏が大明神の社務職という重要な役割を担っていたからとも思われる。

こうした城のあり様は、



復元された富士見櫓
(宇都宮市教育委員会提供)

である。

宇都宮氏時代はもとより、宇都宮氏が滅亡したあと江戸時代初期まで続く。それが劇的に変わるのは、元和五(六一九)年、宇都宮城主となつた本多正純の時である。正純は、從来三の丸まであつた城域を、二倍以上の面積に広げ、東は田川まで、北は釜川まで、西は松が峰外へ土塁を築き空堀を築造、南は不動前まで外堀、土塁を作つたのである。本丸には將軍の日光参詣の際に宿泊する御座所を設け、城主の御殿は二の丸に置いた。

三の丸太鼓門前に三日月堀を造り、大手門を宇都宮明神前から西北の江野町口に移し、街作りをさらに進めたいものだ。歴史を感じない街は、空虚な感じがする。そのようなことがないためにも。